

広島に見る日仏の歴史のひとこま



広島日仏協会
会長 後藤 文生
(広島テレビ放送相談役)

広島に2国間の友好団体はたくさんあるが、なかでも日仏協会は、長い歴史が特徴である。1949年に設立され、63年の活動歴がある。2008年6月、協会設立60年を記念して、ある企画を試みた。これは日仏交流150周年の記念行事の一つでもあった。

広島市内の比治山にある陸軍墓地の一角に、フランス兵の墓が七つ、海に向かって円形に並んでいる。1900年中国で起きた義和団事変で、発展途上の日本も欧米の列強に加わって出兵した。その戦いで負傷した兵士は治療のために広島に運ばれたが、その中に100人ほどのフランス兵士が含まれていた。

彼らは広島の陸軍病院で治療を受け、大半は帰国した。中には治療の甲斐なく広島の地でなくなった者もいた。ここに埋葬された人たちの子孫について、調査をされていた当協会副会長の原野昇氏によって、なぜフランス兵の治療が広島で行われたのか、どんな手続きによるものなのか、誰の裁可によって実現したのか、などがしだいにあきらかになった。

もともとの要請は、1900年6月27日、日本赤十字社から自社の事業として、桂太郎陸軍大臣、山本権兵衛海軍大臣に出された。海軍大臣は東郷平八郎常備艦隊司令長官に詳しい指示を出し、海軍、陸軍の調整はわずか二日で完了、その後、日赤に費用負担をさせず派遣する博愛丸の費用をはじめ、一切を国費でまかなうと決めている。

また「外国人ヲ我陸軍病院ニ收容スルハ今回ヲモツテ嚙^{こうし}矢(注)トシ(略)措置ハ国家ノ体面ニ…」
「食器其ノ他ニ器具ニモ不便ヲ感セシメサル様…」
当時の陸軍内部で交わされた文書には、こうした記述が散見される。日本が文明国家として先進国にどう受け止められるか、帰国した兵士たちが、どんな印象を語るか、そうした評判は、その後の日本国にとって、国際舞台に立つためのきわめて重要なポイントであった。(注：物言のはじまり、最初の意味)

広島で治療を受けた兵士が故国に送った手紙の中には、広島での治療、看護、食事、その他の人々の対応、が細かく書かれているものがあつた。それはまさに政府関係者が考えていた通りの、つまり「国家の体面」を十分に保てる内容であった。

兵士の本国にあてた手紙の中に、次のような一文がある。「俺たちは、親切な日本人によつてものすごくよく治療してもらっている。看護婦さんもみな魅力的な女性ばかり。お医者さんたちは毎朝兵士一人ひとりに非常に丁寧に回診してくれる。」陸軍は食事にも気を遣い、「洋食」を特別に用意したが、兵士にはそれはイギリス料理だったようだ。

2008年6月、協会は兵士たちの遺族の中から、7人を広島に招き、慰霊祭と懇親会を開いた。それは私たちにとっては、友好を深めるというよりは、百年前に広島を舞台に繰り広げられた、日本近代化への歩みを振り返る貴重な機会でもあつた。